

## センター改革構想 - 2 -

### 研究活動の活発化

保 崎 則 雄

#### 基本理念

現在、言語研究センターには、誰かが希望して所員として登録してもすぐに、では早速あれこれをして研究をしていきましょうというシステムが完成された形で構築されていない。いくつかの個々の努力、個人の努力によって研究活動が支えられているのが実態であろう。

研究活動システムに必要な要素は、まず、人材、アイデア、時間、資金、設備、そしてそれらをも有机的、効果的、効率よく機能させるネットワークである。現代の研究活動は、このどれかがかけてもなかなかうまくいかないことが多い。日本の大学の基本的なシステムでは、まったく同じ研究分野の人が同一学科、コースに複数いることはあまりない。それゆえ、共同研究は他の大学の研究者と行うというケースが多くなる。それはそれでいいのだが、センターとしてはお互いがわかる形で、大学の内部の研究者が中心となる形での共同研究の促進を、大学の特色と共に考え、大いに奨励していくべきではなかろうか。現在誰がどのような研究課題に取り組んでいるのかということがよく見えない。知る人ぞのみ知るというのが一般である。年に一度大学の発行する研究活動の報告というような資料で知るばかりである。それも目に見えるoutputが掲載されていなければ、学生を含む多くの大学関係者には大学の研究活動はそれほどわかりやすいとは思えない。言語研究センターのような所では、もう少し具体的な、せめてabstract程度の最新の知識ベースが欲しい。大学提携の姉妹校、付属校を含めて、この知識ベースの構築は対外的にも必要なことである。以下のいくつかの

示唆は、現状を云々するという発想からではなく、センターとしてこうあってはどうであろうかという目標であり、努力の量、質によっては実現可能と思われる事柄ばかりである。様々な人達の論議を期待したい。

#### 1) 研究活動をテーマを絞って行う

たとえば、すでに何人かの人達が授業、研究、その他の仕事などの目的で新設のラボを使用し始めている現状を効率よく発展させることも可能である。具体的には、新設のラボを中心としてそれを利用した、あるいはそれに関することで、ある一定年度テーマを掲げ、研究活動を行う。音声関係、文学関係、マンマシーンインターフェイス、映像関係などなどそれぞれ興味関心ある分野は異なっている、たとえば『テクノロジーと言語研究/教育』『言語教育における効果的なマンマシーンインターフェイス』というような共通するテーマで1年なり2年なり、それぞれ個人あるいはグループでまったく違った分野から取り組み、それをまとめて紀要にする。神大の言語研究センターが中心であるという基盤においては、対外的にネットワークを求めてもよい。狙いは独自性、活動促進、公表、評価を求めるということである。この提案は、上記の人材、アイデア、時間、ネットワークに関することである。

#### 2) 外部研究費への申請奨励、マニュアル制作

(文部省科学研究費、放送文化基金、神奈川アカデミー、横浜市国際交流基金など)を行う。

研究をなささい、ということから来る客員研

研究者はすぐに研究費はいくらもらえるのか、と聞いてくるといふ傾向について米国クリーブランド医学研究所の所長がかつて、嘆いていたことを思い出す。彼の考え方ではまず自分であれこれアイデアを出してやってみてことが始まったら、初めて経費の申請をし、それにはいくらかかるから研究費をいくらくれ、という方向でなくては駄目であるとのこと。賛同できる部分はある。まともな研究費の申請には、必ず現在までの研究結果を記載させる個所がある。それをどのように発展させていくのかということに記載し、経費を細かく、かつ合理的に計算し、研究計画調書が完成する。アイデアを文章化する、練り直す作業を通じて、説得力のある研究計画が完成し、助成金が交付される。また、報告書という形で年に一度、そして科学研究費であれば、3、4年のまとめとしてきちんとした研究報告書を提出するのが普通である。このような一連の作業を経ることによって、研究がより客観的に評価され、またやりやすくなり、対外的にも発表することで知識ベースが効率よく蓄積される。

センターとして毎年いくつか公的な研究申請を行うよう計画するべきである。100万円ほどで遂行できるものや、数100万円あるいは、1000万円単位で行うべき研究など分野、課題によりさまざまであろう。付け加えれば、その手続きがしやすいような知識、経験をセンターは蓄積していくべきである。人材、アイデア、資金、設備、ネットワークという点でこのことは実行すべきである。

### 3) 研究(者)に関するデータベースの構築を行う

現在もそれぞれ各研究者は自分なりの研究ネットワークを持っている。それをセンター活動に活かすような形で統合していく。まず、すぐにでもできることは、既にある大学のhomepage上に各センター、研究所のhomepageをリンクさせ、情報の24時間受信、発信体制を整えておき、研究者の活発な、地球規模のinteraction, communicationを促進して行くことである。それに専従のアルバイトを週に何時間か置く形で機能させるとよいであろう。

これには、センターのホームページで何をどの

ような展望を持って発信していくのかというコンセンサスが大前提となる。単に電子ごみを増やしても仕方がない。昨今はその作成の言語html (Hyper Text Markup Language) を知らずとも作成できるソフトウェアが比較的廉価で市販されている。しかも学部生でも院生でも作業できる人材は昨今珍しくない。このような現実到我々大学研究者は目を向けるべきである。勿論、日本語だけではなく英語版なども用意していく。内部的には、ばらばらの研究を大学として方向づけ、対外的には研究機関としての大学を打ち出して行く方向がよいだろう。姉妹校、付属その他を結びつけるということもでき、その結果研究だけでなく教育の幅、深さというものも改善できるようになればそれが、大きな副次的な効果である。人の交流を積極的に行ってそこから活性化を計るのがいいと思う。これは、人材、アイデア、時間、ネットワークという点で是非行いたいものである。

### 4) センター発行雑誌の充実を計る

Newsletter, 『言語研究』の充実は今まで何回か試行されてきた。それに加えるものとして言語研究をresearch部門とdevelopment部門に分けたり、アイデア、問題提起の場所としていく工夫がさらに必要であろう。姉妹校、付属校の参加、そして交流も視野に入れておくことも大切である。それぞれの研究分野において今どのようなことが問題、話題になっているのかというようなことをさらに幅広く捉え、それに対してどのような研究(問題解決)アプローチが可能であるのかということをもより多くの研究者で議論することもいいであろう。

適宜他大学、非常勤講師からも論文を募っていくこともいいかもしれない。共同研究という形をもっと奨励する方向でセンターが支えていくということである。いろいろな知識、経験というNodeと連携、知恵というLinkをうまくかみ合わせて魅力ある雑誌作りが望まれる。また、それぞれのAbstractぐらいは、データベースにしておき、のちのち活用できるようにするということも考慮できる。さらに対外的には、雑誌が充実すれば有料で購置できるようにすることはどうであろう。これはア

アイデア、ネットワークの充実ということになる。

#### 5) 学会発表用などのプレゼンテーションの援助を行う

すでに大学として必要な映像、音声、文字資料などには教材開発室、スタジオなどが利用され始めているが、研究発表に関してはまだまだ利用が少ない。OHP用のColor Transparency作りやビデオ編集、ポスター（A3, A4版）作り、2D、3Dなどのアニメーション作り、CD-ROM製作、Power Pointでのコンピュータによるプレゼンテーションの制作など現在の設備で可能なことは多い。わからない部分ではラボアシスタントからの助言が得られる。とりわけ海外でのプレゼンテーションでは、色彩、動きといったものは欠かせない。白黒のTransparencyをカラーにするとところあたり

から始め、さらに実写像、動きのある映像、アニメーションという変化もいいかもしれない。分野を問わず様々な形のプレゼンテーションを応用していくことは実際に作業をしているとなかなか面白いものである。アイデア、時間、設備を活用、充実させるとう点で是非提案したい。

以上簡単に研究活動活性化について5つの提案をした。現実にとれだけ自分がそれに参加、利用できるかはさらなるアイデアを持ちつつすすめていけたらよいであろう。人材、アイデア、時間、資金、設備、そしてそれらを有機的、効果的、効率よく機能させるネットワークの消費者としてのみならず、提供／開発／構築者としての参加をひとりひとりが自覚するとさらにより言語研究センターができあがるのではないだろうか。